

社会委員会通信

No. 48

2014. 8. 17

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

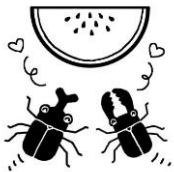
2014 年の平和聖日は、会津放射能情報センター代表の片岡輝美姉に講演して頂きました。原発事故後の政府、自治体、東電等の対応により、多くの真実が隠され、福島県民が分断され、山積する課題が放置されている現状について生々しいお話を伺い、衝撃を受けました。

安倍首相はオリンピック招致プレゼンテーションで、“The situation is under control.”と力説しました。日本国も福島県も安全で安心ですと宣伝する必要があったのでしょうか。この問題はとても複雑です。観光地では放射能汚染の数値を公表しない、漁業団体は検査サンプルの提出に応じない、それぞれの立場で自分たちの生活を守ろうとしているのです。しかし、同じ理由で国や自治体が汚染数値や健康への影響を隠そうとするなら、被災者や福島に住む人たちの健康や命を本当に守れるのでしょうか。

放射能汚染水や汚染土壌の処理・処分が滞り先の見えない中、原発再稼働の動きが急ですが、大丈夫なのでしょうか。十分な安全確認ができないまま、原発を外国に売り込んだとすれば、果たして輸出先の民の安全に責任が持てるのでしょうか。

課題は重く解決は遠いのですが、せめて日本政府は国民にも世界にも正確な情報を発信してほしいと思います。私達も被災地の方々に寄り添い、出来るだけの支援を続けていきたいものです。参加者は 54 名（男性 13 名、女性 41 名）でした。ご参加ありがとうございました。

(社会委員長：M・A)



原発事故の向こうに見えること ～いのちを守る活動から～

会津放射能情報センター代表：片岡 輝美

◆はじめに

よろしくお願ひします。美味しいお昼ご飯をいただきました。身も心もホッとした時に、このような話をするのも気が引けますが、福島県内に住んでいないと分からないことは多々あります。それをお伝えするのが、私の役目と考え、お話をしたいと思います。

◆3・11 前と直後の私たち

中通りが避難区域にならない理由

福島県は、中通り、浜通り、会津地方の3つ

に分けられます。福島第一原発で事故が起きたところから会津若松はちょうど 100km のところにあります。中通りは空間放射線量がとても高いので、避難区域にしなければならないほどですが、なぜ、人を避難させないか…。

短い文章を読みます。2011 年 5 月末、『朝日新聞』の「声」欄に定時制高校教員の投稿が掲載されました。

「授業のことで原発に触れた。3号機は不調のようだねと言うと、4年の男子生徒が怒ったように言った。『いっそ原発なんて全部爆発して

しまえばいいんだ』。内心ぎょっとしつつ、理由を聞いた。『だってさ、先生、福島市ってこんなに放射能が高いのに、避難区域にならないのはおかしいべした。これって郡山市や福島市を避難区域にしたら、新幹線や高速道路が通らなくなる。つまり、経済が回らなくなるからだべ？俺たちは国に見捨てられているんだ。いっそのこと、原発なんて全部爆発した方がすっきりする』。

福島県は、本来避難区域にしなければならないほどの地域を、避難区域にしません。ここを避難区域にしたら、物流が途絶え、県として成り立たなくなります。それが理由だと私たちは思っています。

原発から 100km の地に立つ若松栄町教会

若松栄町教会は2000年に全面修復しました。修復しておいてよかったと思います。これで地震に耐えたと思います。建築されたのは 1911 年ですから、震災の年が建築 100 周年でした。記念礼拝に多くの人々が集まりましたが、子どもたちの胸には、外部被ばく線量を測るバッジが付けられていました。とても悔しい光景でした。

この教会は明治の建築です。旅行雑誌にも載ります。その理由は、野口英世が初期の受洗者だからです。彼は地元では全然良く思われていませんでしたが、千円札になってからは、地域に貢献しています。多くの観光客が来ていました。でも震災後、パタッと人は来なくなりました。その後、『八重の桜』が来ました。私たちは、復興のために大河ドラマがいつか来るだろうと思っていましたが、意外と早く来たという印象を持っています。

会津若松は事故後、除染をしないと宣言しました。なぜなら、除染によって観光客が再び来なくなるのが嫌だから。これは行政の声、観光協会の声でした。そこに『八重の桜』が来てし

まったので、『八重の桜』が終わった後に除染というわけにはいかないですね。私たちは大きな不安を抱えています。



放射性物質拡散と情報の非開示

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、この時から私たちの生活は変わってしまいました。原発事故によって、放射性物質は地形と風の流れによって舞い上がりました。そして、雨が降り、雪が降ることによって、その地域が汚染されていきました。風によって北は岩手県一関市に到達。一関は世界遺産観光地ですので、汚染がどれほどかは公表されていないと思います。日光も同じです。観光地が汚染されると痛手が大きいので、なかなか数値の公表はしません。風に乗って東京にも来ました。放射能汚染は、もはや福島県だけの話ではありません。

海も汚染されました。アメリカ海軍は汚染水が拡がる情報を事故直後から出しましたが、2012 年 3 月に情報を止めました。理由は、ハワイがあるからだと考えます。ハワイの周りが汚染水で囲まれてしまったら、観光に大打撃を受けます。日本も海外も同じです。

このように、私たちが知らなければならない真実は、たくさん隠されていると思わなければならないのです。

避難者を受け入れて避難を決心

最初に若松栄町教会に避難してきたのは宇野朗子さんです。お子さんが 1 人。お友達の親子（お子さん 4 人）と一緒に 3 月 12 日朝 5 時頃、福島市から私たちの教会を目指して到着しました。彼女のお連れ合いは中里見博さん、当時福島大学憲法学教員でした。会津放射能情報センターの前身の「九条の会」は、2005 年の 2 月から毎月の学習会や講演会を通して、中里見先生と繋がっていました。それで、まず会津若松へ宇野さんは避難してきました。

彼女は、福島原発はとても古いので、2011年3月末から県内で展開されるはずだった廃炉アクションの実行委員長でした。ですから、全県のリーダーが最初に避難してきたことに、私は驚きましたが、お子さんが小さいから避難を判断したと考えました。

最初の爆発を一緒にテレビで見た後、彼女は「輝美さん、お世話になりました。私たちはこれから広島を目指して避難します」と告げました。その時、一緒に来たお友達を置いて行かれたのです。その姿に「緊急時に人は自分のことだけ、家族で避難するのか」と、少し複雑な思いになりました。でも、私の考えは間違いであったことに、後になって気がつきました。というのは、一緒に避難してきたお友達も脱原発の仲間だったのです。だから、今は緊急時だということは、二人とも理解していました。その判断によって、避難して来たのです。残ったお友達は大熊町と福島市に親戚がたくさんいらして、その方たちが来るのを会津若松で待っていたのです。『緊急時に避難できる人は先に避難して、避難できない人は避難できる時を待つ』。二人は大人の判断をして別れたので、わだかまりはありませんでした。

一方、福島県民は長い間、福島原発は安全だとずっと言われていたので、そう信じていました。だから、避難した人を卑怯者と思いました。帰って来た時も、大変です。私も避難をしたので、少し経験しましたが…。

宇野さんの出立の時、私は「輝美さんはどうしますか？」と聞かれました。「私は牧師の連れ合いだし、夫は間もなく仙台に入って救援を始めることになっている。一緒に住んでいる末息子は鈴鹿市の義理の弟宅に避難させるから大丈夫です。私はここに残ります」と答えました。すると、宇野さんは「あなたが逃げないと周りの危機意識が変わらないから、絶対逃げて」と言って避難して行きました。私は最初、その意

味が分かりませんでした。クリスチャンとして、牧師の妻として、私はここに残るべき人間だと思っていました。でも、福島原発にプルサーマルが導入された時から、原発は非常に危険なものだということは少しずつ分かり始め、ちょうどプルサーマル反対署名運動をし始めていた時でした。私はどこか怖いという思いを持ちながら、無意識にそれを封じ込めていたように思います。息子が避難し、避難して来た人々もみんなそれぞれ出立して、一人になった教会・牧師館を掃除しながら、充実感を味わっていました。私はやれることをやっただけ。でも、万が一に備えて洋服と預金通帳と印鑑、子どもたちの小さい時の写真をまとめておきました。

15日の朝、再び爆発をテレビの報道で知った時、私はパニックになりました。私は車の免許を持っていませんので、夫がいないと遠くまで逃げられないと思っていました。しかし、会津若松から新潟までの高速バス再開とのテロップが爆発の情報と一緒に流れ、これで私も逃げられると思った瞬間、押さえ込んでいた気持ちが湧き上がってきて、どうすることもできなくなり、避難を決心しました。

避難を決めたもう一つの理由は、甥が会津若松市内に残っていたことです。末の息子と一緒に姪も避難させました。この二人は同い年で、3月11日が中学校の卒業式だったのです。二人とも揃って新潟県の敬和学園に入学することになっていました。二人は14日早朝に避難しましたが、甥は「僕はこれから卒業式だから、絶対避難しない」と言って踏ん張ったので、一緒に避難させられませんでした。でも、今度はこの子を絶対に連れて行かなければいけないと思い、妹に電話をかけて「とにかく連れて来て。私が一緒に避難するから」と伝えました。本音を言えば、私が避難したかったのです。彼が来るのを待っている2時間弱の間に、二人のクリスチャンの友人から連絡があって、「輝美さんど

うする?」「私、避難する」「じゃあ、私も一緒に避難していい? 私、車出すから」。大人3人、子ども2人で新潟に向けて避難したのは、15日の朝8時過ぎでした。

私たちは、幸運にも新幹線チケットが取れ、新潟から上越新幹線で東京へ、そして東京から名古屋を目指しました。3月15日、関東でも最初に放射線量が測定された日でした。東京駅はパニックでした。ごった返していました。

新幹線では「今日は満席です」と繰り返しアナウンスしていました。でも、空席がいっぱいあるのです。おかしいと思って車掌さんに聞いたら、「放射線量が観測されたというニュースが流れた時から突然予約が入って、ある人は予約をしたけれど乗り遅れたかもしれないし、ある人は予約をしたけれど、もっと早い新幹線で避難することができたかもしれない。だから、空いているのです」という話でした。人々はお年寄りや子どもを連れたり、ペットを連れしたりしていましたが、車内は静まり返り、異様な状況でした。

私の避難のきっかけは、宇野さんの「あなたが避難しないと…」という言葉、私のパニック、さらに「九条の会」の学びと戦争体験者である私の両親でもあります。特に、母ははっきりものを言う人で、「緊急時に国は民を守らないんだからね。絶対に守らないんだから。あなたは自分の生命と子どもの生命は自分で守りなさい」と繰り返し言いました。避難しろ、避難しろと言ったのです。彼女の戦争体験の言葉でした。「私は牧師の妻だから逃げない」と拒んでいたのですが、その声に背中を押され、2週間避難することになりました。

私は自分がこんな情けない人間だとは思っていませんでした。十字架につけられたイエスを見捨てた弟子達に「ああ、私、それと同じだ」と自分を重ねました。故郷、会津若松で過ごし、多くの人と繋がって、PTAも地域の活動もやり

ながら、「人の生命も私の生命も大切にしましょう」と言ってきた私が、スタコラと一番初めに避難したのが惨めでなりません。でも、弟家族が暖かく迎え入れてくれました。

実は、避難した先で家族関係が具合悪くなるのが多々あったのです。家は無傷である。何も影響がないように見える。それなのに避難してきた自分の子どもも家族は卑怯者、弱い者だと親が見てしまう。または肉親から、いつまでいるんだと言われる。このように家族同士が分裂してしまうことがたくさんあったのですけれども、幸いにも私たちの家族は、暖かく迎えてくれました。日常生活の中で、少しずつ私も落ち着きを取り戻していきました。

震災から1年後のイースター。私は再び自分の姿を見つけます。エマオへ行く道で、弟子たちが最初はイエスだと分からなかった。でも、一緒にご飯を食べる時に、その姿を認めたのです。私も家族と一緒にご飯を食べ、落ち着きを取り戻す中で、少しずつ「またここからやっていけるかな」という気持ちになっていきました。弟子たちも、あの時一緒にご飯を食べた日常生活の中でイエスと再び出会った。私もそのような時を与えられたのだと思います。



◆県民を分断した国家や科学者

会津若松に帰った後、待っていたのは、「ただちに影響はありません」という安心安全キャンペーンです。山下俊一教授は日本甲状腺学会の会長です。彼は医師として、チェルノブイリ原発事故以降その地域に入り、放射線が人々の体にどういった影響を及ぼすかということをよく知っています。彼は福島県に入り、続いて弟子の科学者たちも次々入って来ました。彼は福島県内をくまなく歩いて、「この原発事故は大ごとではありません。大丈夫です。チェルノブイリよりずっと小さい事故です」と言いました。

県内最後の講演会が私たちの町の隣町、喜多

方市であったので、私も「九条の会」の仲間と一緒に出かけました。質疑応答で、ある教師が「山下先生、来年から学習指導要領に原子力エネルギーが入って来ています。この事故を受けて、私たちは子どもたちに何と教えたらいいのでしょうか？」と尋ねました。文科省は既に原子力は安全だということを教育し始めるところでした。その直前の事故だったのです。

この質問を受けて山下教授は、「福島県の子どもはラッキーです。なぜなら、線量がこんなに高いところは日本にはない。そして、一人ひとりがガイガーカウンターを持つことによって、自分の目でその測定をすることができる。万が一、自分の体に何か影響があった時にも、それを克服することによって、ここから偉大な医者や科学者が生まれて来るかもしれない。長崎や広島に比ではありません。福島の子どもはラッキーです」と言ったのです。信じられない話でした。

私はいろいろ質問を準備していたのですが、この言葉を聞いて思わず「嘘つけー！」と叫んでしまいました。私たちはモルモットじゃない、あなたは真実を知っているはずだから、真実を私たちに伝えるべきだと叫びました。けれども、彼の言葉を信じたい人がたくさんいました。信じないではいられなかったのです。ちなみに、山下教授は長崎被爆2世です。そして、クリスマスチャンでもあります。

モニタリングポスト数値疑惑

県内では毎日テレビで1日に2回、その日の最大と最小放射線量の情報を発表しています。これを見る時、気をつけなければなりません。この数量が全て正しいかと言うと、そうではありません。場所によって全然違うのです。雨どいの下のように、警報音が鳴り高い数値が出るところもあれば、そこから1m離れたら、全然違う数値が出ることもあります。官公庁が発表しているのは、比較的低い数値だと考えていま

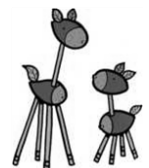
す。

事故前の空間線量は $0.04\sim 0.06\mu\text{Sv}/\text{時}$ ですので、大体間をとって $0.05\mu\text{Sv}/\text{時}$ と覚えていただければよいです。となると、この日、会津若松の最小線量は $0.04\mu\text{Sv}/\text{時}$ だから、事故前と同じくらいかもしれない。しかし、非常に高い数値が出る場所も確実にあります。レントゲン室は放射線管理区域です。人が住んではいけないところです。放射線管理の技術を学んだ人だけが働くことができます。レントゲン室内は空間線量 $0.6\mu\text{Sv}/\text{時}$ です。ということは、レントゲン室の中で、常時人が生活しているのと同じ状況が県内で続いているわけです。また、この放射線量は、大人に比べ子どもは背が低いので、地面から出て来る放射線の影響を受けやすいのです。

県内くまなく置いてあるモニタリングポストは、太陽光で動き、空間線量を測るものですが、場所によっては2台並んでいるところがあります。最初に設置されたアメリカ製ポストは、数値をはっきり出します。ですから、福島県や文科省は嫌がりました。そこで、納期が遅れたという理由でこの会社との契約を破棄して、日本製のものを入れました。日本製を設置する時には、少し高いコンクリート台を打ったり、周りを除染したり、草むしりをしたりしています。

この日本製ポストの数値を私たちは信用できません。琉球大学名誉教授・矢ヶ崎克馬先生が郡山市内にあるモニタリングポストを測ってみたところ、数値が20~40%削られて出ていたそうです。ここでも私たちは真実を知らされていないのです。

◆会津放射能情報センター 情報センターは県民の縮図



「会津放射能情報センター」を2011年7月に立ち上げました。その2ヶ月前に「放射能から子どものいのちを守る会・会津」を立ち上げ

ました。前身が「九条の会」ですから、創立メンバーはその仲間です。私のようにしばらく避難して会津に帰った者もいれば、避難できないままでしたとか、いろいろな立場の者がいたのですが、4月初めに再び集まり、放射能から生命を守る団体を作ろうと、動き始めました。

情報センターは、県民の縮図だと私は思っています。会津地方に住む人たち、自主避難者、強制避難者が集っています。この3者は県外から見れば、同じ福島県民に見えるかもしれませんが、違います。強制避難者は訴訟を起こし、日常生活が突然奪われ、強いられたこの3年間の思いを訴えています。

一方、脱原発を叫びたいと思っても、もしかすると、震災前の東電との関係や強制避難者が受け取っている精神的賠償金を持ち出され、批判を受けてしまうかもしれないと恐れる人たちがいます。県内自主避難者たちは、放射線量の高い自宅を置いて、お父さんが通勤できる、または週末に家族が会うことができるという判断のもとで、会津若松へ避難してきたわけです。しかし、強制避難者は福島市や郡山市に建てられた仮設住宅に住まわされているわけです。でも、福島市などから避難してきた人たちは、そこに家がありながら、会津若松市へ避難してきているわけです。そうすると、強制避難者たちにしてみれば、自主避難者は家があるのに逃げに行くわがままな人たちなのです。自主避難者は会津若松に来て、自分たちも同じように会津若松市民として生活したいと声を上げる。でも、自分たちが声を上げたことによって、会津は安全なところだと思われてしまうのではないかと、その証拠を作ってしまうのではないかと、会津から県外に避難した人たちがいるのに、その人たちの足かせになってしまうのではないかと、思うわけです。

会津の人間は、強制避難の人たちや自主避難の人たちの苦勞を聞いたら、自分たちは被災者

だとはとても言えない。家はあるし、家族はいるし、仕事があって、震災前と同じ生活をしているから。このように、それぞれが『痛み比べ』をしてしまうことによって、自分たちが被災者だとは言えないと、自ら口をふさいでしまいたくなるのです。でも、情報センターでは、お互いの痛みを聞き合いながらも、やっぱり自分も被災者だ、あの時から以前の生活を奪われてしまい、不安を抱えているのは間違いないから、被災者として声を上げ続けよう、私たちが黙ってしまうことは、権力者、日本政府の思うつぼにはまってしまうから、それはやめようと語り合っています。



数値の収集と情報の発信

情報センターには二つの働きがあります。一つは、安心して暮らしたいから、安全な食べ物を食べたいから、数値を収集して情報を発信します。つまり、安全かどうかは私が決めるのです。県や国が出す安全基準値を容認することはできません。今、食品1kg当たり100Bqとされていますね。それは1kgの食べ物から毎秒100本の放射線が出ているという意味です。1kgのものを食べる人は、そうはいませんが、自分が食べたものの中に放射線物質が入っているかもしれない、それによって内部被ばくが起きることもあり得るわけです。100Bq大丈夫だと言われても、もしかしたら、それが99Bqや90Bqかもしれない。もしかしたら、限りなくゼロに近いものかもしれない。その間がとても問題なのです。だから、私たちが前から声を上げ、求めているのは、県による全ての数値の公表です。それによって自分たちがそれを食べるか食べないかを判断するのは、私たちの当然の権利だと思っています。

食品放射能測定器導入

私たちは早い時期から、食品放射能測定器を

導入しました。価格は240万円です。1市民団体がこんなものを買わなければならないなんて、ばかばかしく思いますし、最初から私たちはお金があったわけではありません。ドイツのキリスト教人権団体EMSが、2011年初夏にセンターを訪れて、私たちの活動を見てくださいました。その後、しばらく音沙汰がありませんでした。いよいよ食品測定器を買わなければならない。でもお金がない。私はセンター債を発行しようと思っていました。1口5千円でみんなからお金を集めて。

ところが、食品測定器を買うか買わないかを決める日の前の晩、EMSから1通のメールが届きました。「献金をおさげします。ご自由にお使い下さい」。240万円です。私、ユーロなんて見たこともありません。1桁違ったら大変なことになりますので、何回も計算しました。本当に240万円になるのです。神様に感謝しました。信仰の薄い者と言われるかもしれませんが、「神様はいる！」と思いました。今、この測定器を2千回近く使っています。食べ物、水、牛乳などの他、土壌も測っています。

あるお母さんの話

ひとりのお母さんの話をします。彼女が結婚した先は農家でした。震災前はおじいちゃん、おばちゃん手作りの作物を食べていました。会津のお米や野菜は本当に美味しいのですが、原発事故後、彼女はその作物が本当に安全かどうか分からなくなりました。いろいろ考えた結果、九州から野菜やお米を取り寄せることにしました。でも、家に届いてしまったら、おじいちゃん、おばあちゃんの気持ちを傷つけてしまうことになるので、郵便局留めにしました。仕事が終わった後にそれを受け取り、夜中に台所の食材と取り換えていました。それは家族への配慮です。そのようなことがずっと続いていました。

彼女が私にその話をしてくれた時、「本当によ

く頑張っているね」と言ったのですが、「でもね、輝美さん。お百姓さんってスゴイよ。おじいちゃんが炊き上がるご飯の匂いをかいで、これはうちの米じゃないって言うんだよ。玉葱を見て、こんな玉葱うちでできないって言うんだよ。本当にドキドキする」。そして、とうとうおじいちゃん達に分かってしまったのです。

でも、彼女はお義父さんたちに自分の選んだ食材で子どもたちに食べさせたいと伝え、食卓には彼女が作ったものとお義母さんが作ったものの2種類が並ぶことになりました。夫は彼女の気持ちを良く理解してくれる方でした。

実は、私が避難したことを知って、彼女も自分たちの子どもを避難させることを決意したのです。ですから、宇野さんが私に「あなたが避難しないと周りの危機意識が変わらないから」と言ったのは、彼女と結びつくのです。私が避難することによって、彼女はいよいよ危ないと判断し、自分の子どもを四国に避難させることにしたのです。ほかにも避難をした友人たちがいました。

話を戻します。とうとう食材を取り寄せていることが分かってしまったのですが、夫は彼女の気持ちを理解しつつも、「おれは、やっぱり母ちゃんが作ったものを食べる」と伝えました。貧しい農家だったけれども、両親は自分を学校に行かせてくれた。つまり、農作物は単なる現金収入だけではなくて、そこには家族の歴史があり、思い出があり、愛情があるのです。だから、彼はお母さんの作った料理を食べ続けていました。そして、この食品測定器が導入されてから、彼女たち夫婦はよく利用し、自分たちの食べ物は大丈夫だという確認をとって食べています。ですから、今は家族で同じ料理を食べているとのことでした。

車に空間線量測定器を搭載

空間線量を測るために、車に取り付ける測定

器も導入しました。車の窓に取り付け、5秒間に1度、空間線量を測ることができます。GPSとメモリーが搭載されているので、それをHP上にアップし、空間線量が可視化できます。

例えば、会津若松の運動公園の数値を見ることによって、あるお母さんは、これは高すぎるので遊ばないと判断する場合もあれば、これは大丈夫と判断するお母さんもいる。不安をもって子どもを遊ばせる必要がなくなるわけです。それぞれが子どもを遊ばせる、遊ばせないという判断ができます。安全かどうかを自分で確認し判断するというのは、このようなことです。

土壌の測定



私たちは土壌の測定もしています。0.3 μ Sv/時が測定されると、私のウクライナ製の測定器は警報音を出します。若松栄町教会の敷地内でも、鳴るところがあります。滑り台の下は線量が高いのです。雨や雪が流れ、放射性物質が濃縮するのです。2011年3月まで教育館は教会付属託児所として40数年使われ、閉園後の今は情報センターが使っているのです。託児所があった時には、多くの子どもたちがそこで遊んでいました。私たちの息子たちもそこで遊んでいました。炭が放射性物質セシウムを吸収すると聞けば、炭をまいたり、または土を削ったりしましたが、滑り台の下の線量を下げることができませんでした。低くなりませんでした。ふと、気がつきました。滑り台を撤去すれば、子どもはここで遊ばなくなるんだ！だから、撤去しました。とてもとても悲しかったです。子どもが遊ばない滑り台も悲しかったのですけれども、そうせざるを得なかった状況がとても悲しかったです。4人の息子は滑り台撤去を知り、泣いていたみたいです、自分たちの思い出の滑り台がなくなったと…。

今、センターは小学生の運動着を測定しています。運動着を上と下に分けて細かく切り、測

定器に入れます。上着よりもズボンに線量が高く出ます。子どもの足元に放射性物質が付いているということ、洗っても取れないということです。しかも、そのまま子どもたちは家に入ってきて来ますから、家の中に持ち込まれるわけです。現在、30着分測っているのですが、その数値をまとめて会津若松市教育委員会に持って行きたいと思っています。

子どもたちの健康を考えるために、空間線量を測定するだけでなく、土壌測定が大切です。土壌が汚染されているのは間違いないので、どこがひどく汚染されているか、どこが安全かを見極めなければならないと思っています。通学路の測定を続けていますが、小学校PTAの測定反対の声が大きいのです。「〇〇君の家の周りの線量が高いと分かってしまった時、いじめの原因になるから」と言われます。でも、分からないままで生活していて本当によいのでしょうか。

学習会、子ども健康相談会、しゃべり場

情報センターの働きは、もう一つあります。「命こそ宝」の社会を目指すこと。みんなで一緒に原発事故を繰り返さない社会を作り出すことです。真実を知るための学習会を続けています。また、子ども健康相談会も実施しています。大阪教区支援によって山崎知行医師が毎月センターにお出でになります。個別相談前にはお母さんに問診票を渡し、お子さんの気になる症状をチェックしてもらいます。小児甲状腺がんだけが被ばくによる影響ではないのです。また、グループ懇談会でも、お母さん達の不安や疑問に答えてくださっています。

私たちが気になっているのは、子どもの突然死です。チェルノブイリ事故後、多くの子どもたちが突然死しました。体の中のセシウムが心筋を冒し、ある日突然その動きを止めてしまったと言われています。

あるお母さんから夜遅く電話で「胸が痛い」と子どもが言っている。どうしたらよいか」との相談がありました。私は、放射能の不安は口にしないで、心電図を撮ってもらうことを勧めました。幸い、その子に異常は見られなかったのですが、子どもだけではないですね。特に高齢者で、この間まで元気だったのに突然亡くなったという人が多いのです。何の影響か分かりませんが、不安な気持ちになります。

さらに、幸いなことに、昨年秋から小林恒司精神科医に毎月来ていただいています。個人やグループの懇談が続けられています。先生の発案によって、「男性限定の会」を春から開始しました。お母さんたちはセンターに来て情報を集め、お互いに気持ちを語り、時には慰め合ったりするのですが、男の人たちにはそういう場がないのです。初回の会には、若いお父さんからおじいちゃんまで来ました。福島市から自主避難で会津若松市に来ているお父さんもいれば、会津若松市から岡山に母子を自主避難させているお父さんもいます。それぞれの判断を持って生活しています。とても嬉しかったので、最後にちょっとお酒が入り、乾杯をしました。今もこの会は続いています。

不安を語り合うしゃべり場は、とても大切な場所です。未だに私たちはなかなか外で放射能の話をする事ができないのです。私にしてみれば、県外でお話する方がずっと気楽です。県内で話をする時は、すごく緊張します。誰が聞いているか分からないからです。

保養プログラム

私は先週、神戸に1週間、子どもたちを引率しました。保養プログラムにどんな効果があるのだろうと言われていますが、チェルノブイリ事故後、チェルノブイリ法が制定され、子どもたちは年に2回、3週間から1ヶ月保養に出かける権利が与えられました。夏休みだけでなく、

通常時も保養先に行き、健康的、医学的、精神的、社会的なプログラムによってサポートされるのです。子どもたちは保養プログラムに入る時に、ホールボディカウンターを受け、身体全体の被ばく量を調べます。保養終了時、もう一度測ります。そうすると、セシウムが大体20%ダウンしているのです。長期に亘ってきれいな空気の中で生活することで、子どもたちは回復すると言われていました。

私たちは日本基督教団新潟教会との共同プログラムとして「にいがたはうす」を作りました。新潟教会員の一軒家をお借りしています。そこにいつでも1家族ずつ遊びに行き、しばらくゆっくりしていただくというプログラムを続けています。このように、福島県から出てホッとすることは、子どもだけではなく、親御さんにとっても大切です。

これまでの話でお分かりのように、原発事故は、私たちが当たり前健康に暮らしていく権利を奪い取ってしまったのが現実です。そのことに気がついた人々からの声によって、権利を回復するための「けんぼう学習会」が始まりました。



緊急時の備え

緊急時に私たちは備えています。なぜならば、あの原発サイトは一向に落ち着かないからです。ますます危険な状態になっているからです。

凍土壁というのを聞きになったと思います。原子炉周囲を凍土壁で囲み、地下水が中に入らないようにするというものですが、全く実現に近づいていません。この暑さの中、凍土にもならず、入れた氷は瞬間に溶けます。それは汚染水になってしまうかもしれません。各原子炉には1日100tの地下水が流れています。地盤沈下を起こしていると言われています。

「震度5強の地震があったら、後ろを見ないで避難するように」。これは、原発で働いている

人の言葉です。つまり、いつ倒れるか分からないのです。倒れてしまったら、もう人は近づくことができません。福島県内、東日本の汚染どころではありません。北半球が汚染されてしまうだろうという危機的な状況です。

ですから、私たちは緊急時に備えて、安定ヨウ素剤を2012年夏に配りました、汚い人工ヨウ素が私たちの体に入る前に服用し、その場から避難することになっています。安定ヨウ素剤は県から県民には配られませんでした。配ったのは、三春町内だけでした。

今になって分かったことですが、福島県立医科大学の医師たち、そこで働く人々、医学生、出入りする業者、そして医師たちの家族には配付されたようです。医師たちは被ばくした人たちの治療に当たるわけですから、服用は当然ですし、科学的な知識があれば当然です。けれども、県民には何も言わないで、自分たちだけ飲んでいました。これは非常に大きな問題です。

マイクロバスを、昨年の北海道の保養で知り合った一乗寺さんというお寺からいただきました。これは、緊急時避難のためです。福島県内にしか親戚がいないセンター会員がいます。県外のどこに行ったらよいか分からない人たちがいます。また、震災が起きた時には、まずはおじいちゃん、おばあちゃん、子どもをお願いしたい、自分たちは仕事のためにすぐ避難するわけにはいかないというご夫婦もいます。ですから、そのような人たちと一緒に避難をするために、このバスを用意しています。これが使われないことが一番良いことです。でも、常時私たちのセンターの前にこのマイクロバスがあるというのは、自分の気持ちの中でも引き締める意味もあると感じています。

脱原発アピール

全国や福島県内で脱原発アピールが続いています。毎週金曜日4時から5時、アーケードの

下で、比較的年齢の高い人たちがずっと立ち続けています。この8月に100回目を迎えます。「やめさせ原発」というのは、会津弁で「原発をやめなさい」という意味です。時には若い人たちも一緒になって、会津若松市内でデモ行進を行い、東電前、告訴団などでの発言を続けています。



◆今、福島で起きていること 増え続ける震災関連死

福島県で起きていることを話したいと思います。原発事故収束宣言が出されたのは、2011年12月16日です。当時は野田首相でした。誰も原子炉をのぞいていないのに、事故の収束を宣言してしまいました。そのことによって、私たちの周りは一気に復興のムードが高まりました。原発事故収束宣言以降のキーワードは「絆・復興・除染・賠償・帰還・健康管理・放射線教育・食の安全教育・・・」ですが、問題は山積する一方で、課題は何も解決されていません。ますます複雑になって来ています。

昨日の『福島民報』という新聞の発表では、福島県の震災直接死は1,603人です。これは地震や津波に遭って亡くなった人たちです。ですから、この数字は、新たに遺体が見つかったら変わります。

一方、増えているのは震災関連死です。原発事故が起きて避難する最中や避難先で命を落とした人々、または自分の生活に絶望して自死した人は今現在1,739人です。100人以上直接死を上回ってしまいました。この1,739人は原発事故がなければ生きていた人たちです。もっと長生きできた人たちです。この関連死を認めてもらうのは大変です。原発事故過小評価をしたい県がすぐ認めることはありません。

福島県環境創造センター

福島県の中は一気に復興に向き、莫大なお金

が投入されています。これは、私たちの税金です。「福島県環境創造センター」が着工されます。南相馬市と三春町の2カ所に建設予定です。各100億円の予算です。当初、私たちは除染の研究などに使われるセンターかと思ったら、そうではなくて、教育の場であることが分かりました。対象は県内小中学生。全員がここを訪れます。そして、いかに放射線は大丈夫なのか、県の復興を見学し、さらに再生可能エネルギーの可能性を教育します。球体のドーム360度のパノラマが作られるそうです。ここにはIAEA(国際原子力機関)をはじめとする「原発推進を目的」とした国内外の機関が連動していきます。IAEAには二つの役割があります。核の悪利用を止めること、そして、商業原発を推進すること。IAEAは原発推進機関です。福島県内でその役割が進められています。

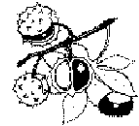
空間線量の引き上げ

これは先月の話ですけれども、空間線量が引き上げられました。人は、原発事故前の年間許容被ばく量は年間1mSvでしたが、そこに追加1mSvとなりました。それを割り出していくと、0.23 μ Sv/時くらいなら人は住めると、除染の目標値として出されたのです。ですが、0.23 μ Sv/時と言っても、震災前は0.05 μ Sv/時でしたから、既に5倍近いのです。こんなところに人がいてはいけないのです。震災に遭ったからと言って、日本人の体が放射線に対して強くなったわけではありません。にもかかわらず、この数値が設定されました。しかし、どれほど除染してもここまでは数値が下がらないということが分かったので、0.4~0.6 μ Sv/時に引き上げることを環境省は決めました。

この話の出所は福島県内の自治体です。ここまで引き上げてもらわないと人々は帰還できない、このままだと自分たちの町は消滅してしまう、人を帰すために線量を上げてくれと言った

のです。

先ほど申しましたように、レントゲン室は0.6 μ Sv/時です。0.6 μ Sv/時の中に人々は住まわされるのです。福島県の民友新聞で大きく取り上げられています。「毎時0.23 μ Svの目標否定」。それは単なる目安であって目標ではなかったと、今や政府は言い始めています。このように、現実に達成できない困難なことがあると、必ず数値が上がっていきます。これが国のやっていることです。



中高一貫校の新設

昨年5月13日の『朝日新聞』に、子どもが戻らなかったら地域が消滅するから、福島県双葉郡に中高一貫校を新設するという記事が載りました。まさかと思いましたが、着々と準備が進められていて、今年2月、広野町に中高一貫校の新設が発表されました。これに先立ち、県内全中学の1、2年生3万7千人に対して「中高一貫校ができます。とても魅力的な学科があります。あなたはここに入りたいですか?」との意向調査をしたところ、745人の子どもたちが入りたいと回答したのです。113人は双葉郡の子どもたちでした。自分たちのお友だちと同じ地域で学校に行きたいと思うのは当然のことです。これを受けた福島県は、一定のニーズがあると判断し、福島県は動き出しています。これには3億円が当てられます。

今、双葉郡の高校は、サテライト校として県内外に間借りの学校を設置しています。このサテライト校が徐々に閉鎖されていきます。新入生は取らず在校生を減らし、2017年には休校にして、この中高一貫校に全部まとめるのです。この一貫校は福島原発から30km圏内の広野町に建てられます。

◆甲状腺検査を巡って

「日本甲状腺学会の皆様へ」という文書

最初の甲状腺検査は親の不安を解消するためでした。でも、私たちの不安は一向に解消されません。むしろ、疑惑と不信感が募っていきます。皆さんのレジメに山下俊一教授と鈴木眞一教授の名前による「日本甲状腺学会の皆様へ」の文書があると思います。2011年11月から福島県は、事故当時18歳以下の子どもたち約37万人を対象に甲状腺検査を始めています。この文書には「県内の子どもたちが成人するまで福島県は追加検査をします。でも、それを信用しない親は県外の先生方の病院で二次検査を希望すると思いますが、それはしなくてもいいです」という趣旨です。これは、セカンドオピニオン阻止の文書ですが、大きな影響がありました。これを受け取った福島県外の医師たちは、福島県を信用したのです。私たちが当然与えられている権利、セカンドオピニオンを取ることを阻止しただけでなく、県外の医師たちは、二次検査をここでしてしまったら、この親子は福島県に帰った時、もう福島県立医科大学の検査を受けないだろう。そうすると、福島県が集めようとしている調査は不正確になるかもしれない。だから、ここで検査をすることはやめよう」と考えたのです。

一方、小児甲状腺がんの人数が増えることによって何かおかしいと気づき始めたお医者さんたちが、人々の避難先で、または保養先で子どもたちの甲状腺検査を行ってくださっています。8月の3週目に、私は子どもたちを北海道に保養に連れて行き、そこで甲状腺検査をしてもらうことにしています。



小児甲状腺がん

今年の5月に県民健康調査検討委員会が公表しましたが、小児甲状腺がんの悪性として、既に摘出を行った子どもが50人います。そして、悪性の疑いが39人います。1名が良性だと後から分かったのですが、38名の子どもたちもま

もなく摘出することになります。私たちは、会津の子どもたちがいつ検査を受けるか分からない時に、鈴木眞一教授から直接説明を受けました。「甲状腺がんは本当に小さながんです。予後がいいのです。お薬を飲んでいれば大丈夫なのです。転移は絶対ありません」と言われました。けれども、子どもが一生薬を飲み続けなければいけないのは、普通ではありません。子どもたちは精神的には大きなショックを感じています。本当に耐えられないことです。そして何よりも、我が子が手術室に入って行く時の親の気持ち、子どもを守り切れなかったという気持ちはどうでしょうか。90人という数字にも衝撃を受けませんが、子どもたちの今後のこと、親の気持ちを考えた時、私たちはこの数字だけに注目してはなりません。

私の息子は事故翌月から新潟に行きました。3年後、敬和学園高校を卒業して帰って来た時、甲状腺の検査を受けました。その時、親は立ち会えないのです。子どもだけが入るのです。立ち会えたとしても、その検査技師と親は、やり取りできないのです。技師は何も言っていないと言われていたのです。おかしいと思いませんか？ 検査結果は、後に自分たちの手元に来ますが、それは大きくA判定、B判定、C判定と分けられています。膿胞数と結節の数・大きさなどによって分けられるのです。先日の市民団体主催の検査で私はA2判定となりました。膿胞はその時の体調によって出たりひっこんだりするものですが、我が子にどのような影響があるか、とても心配です。親はもっと詳しい資料、結果がほしいのですが、その場合は情報開示の請求をしなければなりません。でも、全部分かるかと言うと、そうではないのです。

検査結果には、検査した者の名前が消されています。子どもが将来、甲状腺がん、または何かの疾患を患った時、誰が検査したか責任の所在が分からないのです。福島県は「この大勢の

検査によって恐らく誤診が出て来る。検査に当たった人たちが訴えられるだろう」と、医療訴訟に備え 10 億円の保険に入ったのです。お金の使い方が違うと思います。このような本当にあきれ果て、疲れさせる絶望的な出来事が毎日次々起きているのです。

◆原発事故の向こうに見えること

差別する国家

原発事故の向こうに見えることは差別です。1964 年、原子力エネルギーが日本に入って来た時の話です。原発は、いくつもの指針をクリアしないと建てられません。そのうちの一つは、原子炉の周囲は非居住区域であること。二つめは、非居住区域の外側の地帯は、低人口地帯であること。三つめは、原子炉敷地は人口密集地帯から離れていることです。この指針から分かること、それは、原発は事故が大前提だということです。事故が起きた時、人口密集地、都会の人たちの被害と過疎地域の人たちの被害を比べれば、「過疎地域の人たち、がまんしてね。ごめんさいね。あなたたちは都会に比べれば人数が少ない。取るに足らない」。だから、原発が過疎地域に押しつけられているのです。

今回の事故では、強制移住は 170km になるどころでした。これは、菅直人前首相が最悪の状況に備えて検討した数値です。実際そのようにはなりません。でも、170 km 以上避難しなければならぬような状況だったかもしれません。この夏は全ての原発が止まっていますが、私たち電気に困っていますか？ この夏、節電と言っている政治家がいますか？ 関電は必死になって電力不足を言い、危機感をあおっているようです。

原子力発電所と原子力エネルギー政策は憲法違反です。差別の上に成り立っているのです。人々の生活、命、健康、歴史、思い出、何もかもなくなったとしても再稼働させる、なくなっ

たとしても海外輸出する、輸出した先は、地震が多いトルコです。どうするのですか？ トルコで大きな事故があったら、日本は賠償請求されますよ。国として成り立たなくなります。つまり、私たちが生きているこの国家は、私たちを差別する国家だということが分かります。

「水俣病と福島に共通する 10 の手口」

アイリーン・美緒子・スミスさん (Green Action 代表) は「水俣病と福島に共通する 10 の手口」を書き出しました。

- ①誰も責任を取らない／縦割り組織を利用する。
- ②被害者や世論を混乱させ、「賛否両論」に持ち込む。
- ③被害者同士を対立させる。
- ④データを取らない。証拠を残さない。
- ⑤ひたすら時間稼ぎをする。
- ⑥被害を過小評価するような調査をする。
- ⑦被害者を疲弊させ、あきらめさせる。
- ⑧認定制度を作り、被害者数を絞り込む。
- ⑨海外に情報を発信しない。
- ⑩御用学者を呼び、国際会議を開く。

権力者たちは、私たちが混乱し、お互いに対立するのを待っているのです。



◆おわりに

大熊町では、セイタカアワダチソウが生い茂り、田んぼは本来の黄金色でなくなり、放たれた大型動物が隠れて見えなくなるほど荒れています。ここに人が戻れるのでしょうか。戻ったとしても、緑豊かな土地に戻すには、何百年もかかるでしょう。3年4ヶ月の日々、先が見えない不安に私たちの心は覆われています。それはなぜでしょうか？ 真実が語られていないからです。真実が隠されているからです。ですから、私たちは共に学び合い、知る力と見抜く力を身につけて、本当に重要なことを見分けられ、「命どう宝」の平和を作りだす群れになりまし

よう。

情報センターに集う人々の笑顔に支えられて、このように私の体験を聞いてくださる皆さんに支えられて、私は歩み続けています。一人ひとりの命が大切にされるよう、特に主の祈りの中で、「私たちに日用の糧を与えてください」と祈る時に、本当に私たちが食べているものが安全なのかどうかを思い起こしていただきたい。皆さんがご自分で考え、判断していただきたい。福島のことを考える、繋がるということは、福島に直接行く、福島のために献金する、それも大きなお支えではありますが、自分の足元、本当に自分たちが住んでいるところが安全なのか、原発事故の影響はないのか、自分たちの生きている場所が、自分の体が、自分の子どもたち、孫たちの生命が守られているのか考えていただきたいのです。風評被害払拭のために「福島産

を食べて応援」と言いますが、私は賛成しません。あおられなくていいです。まずは自分たちで安全を確認することが大切です。内部被曝によって生命を短くする必要はありません。おじいちゃん、おばあちゃんが元気でなければ、お父さん、お母さんは子どもを育てることができません。おじいちゃん、おばあちゃんがしっかりとした生き方を見せてくださることによって、下の世代が、またその下の世代が、その姿を見て育っていきます。

私たちはとんでもない世界を作って、それを下の世代に押しつけることになりました。創造主と次世代に心から謝罪しつつ、一人ひとりが与えられた生命を最後までしっかりと生きていく姿を示していきましょう。それが、主が私たちに求めていることだと信じています。



推 薦 図 書

- 『福島原発事故 県民健康管理調査の闇』日野行介(著) 岩波新書 821円
『原発事故と甲状腺がん』菅谷昭(著) 幻冬舎ルネッサンス新書 905円
『今、いのちを守る』(TOMO セレクト 3・11 後を生きる)片岡輝美(著) 日本キリスト教団出版局 864円
『原発とキリスト教：私たちはこう考える』(新教コイノーニア) 高木仁三郎・宮田光雄・新谷英敏・栗林輝夫・片岡輝美、他 19名(著) 新教出版社編集部(編) 1,728円
『わたしたちのこえをのこしますー福島原発事故後を生きる・もう一つの記録集ー』武藤類子・片岡輝美・鈴木絹江・うのさえこ・木幡ますみ・菅野千景(著) ロシナンテ社(編) 解放出版社 1,404円



社会委員会からのお知らせ

- ★社会委員会では、学習会でお話しして下さる方を募集しています。自薦他薦を問いません。ふるってご応募ください。
- ★学習会で取り上げてほしいテーマがありましたら、社会委員にお申し出ください。